

「文武二道萬石通」(朋誠堂喜三二)

江戸中期、久しく幕政を支配した田沼意次が失脚して、松平定信が「文武奨勵」を旗印に寛政の改革を推進し始めるや、江戸で發達した繪入文藝、所謂「黄表紙」の代表的作家達が政情を組上に載せる作品を相次いで發表した。「文武二道萬石通」もその一つだが、作者喜三二の本來の身分は秋田藩二十萬石の江戸留守居役といふ上流の武士であり、幸田露伴によれば、彼は「江戸の水に染み江戸の風で育」ち、「當時の江戸の第一流の社會に觸れるに適した人」で、「文學好き、美術好き」で「天稟も聰明」だったから、彼の描く江戸は「先づ信賴して當時の江戸と見てもよい」といふ事になる。然らば定信の新政に搖れる「當時の江戸」を、機知や諧謔や穿ちを本領とする黄表紙によつて喜三二はどう描いたか。かういふ話である。

或時、鎌倉將軍頼朝が賢臣畠山重忠にかう云つた。「われ四海ををさめしより、日本の大名小名安堵の思ひをなすといへども、武備におこたる心生ずべし。治世といへども文ばかりにて

はをさめがたし。今鎌倉の大小名、文にかたぶくもの何ほど、武にはやるもの何ほどといふ事をなんぢが智慧をもつてはかるべし。重忠が「はかりごと」を用ゐて大小名を富士山中に誘ひ出し、彼等の性向を観察すると、「文人より武勇の人が餘計」だが、どちらでもない「ぬらくら武士」が一番多い、といふ結果になつた。報告を受けた頼朝は、「文より武の勝つたるは」目出度いが、「ながく世のしづかなほど、自然と文は勝つものだ」から、俺も懸念して色々差出がましい事を云ふ譯だが、然らば今度はその「ぬらくら武士」どもの性向を見分けて、「文武の二道」にしかと導けと重忠に命ずる。

重忠は再び計略を用ゐて「ぬらくら武士」を箱根七湯に招き、遊興に耽らせて密かに性向を調査する。それと知らぬ武士達が蹴鞠、拳、茶、淨瑠璃、骨牌、藝者遊び、男色等々、てんでに「好きな事をしてたのしむ」姿は素町人と何ら變らない。中には淫賣を求めに行つて山賊に扮した重忠の部下に脅され、「ふんどしばかりは、ごめん下さりませ」と謝る大名さへある。最後に武士達は大磯の遊郭で遊び狂ひ、三萬兩の借金を拵へて醜態を曝す。

そこに重忠が登場して「はかりごと」を打明け、「柔弱の心をあらため、武をはげみ給へ」と諭して事の顛末を頼朝に報告すると、頼朝が「ぬらくららの大小名をめして」云ふ、「自今以

後それぞれに、文武の道をまなぶべし」、斷じて「ぬらくらの心をもつべからず」、そんな有様で「今にもいくさがあるならば」どうする積りか。一同、恐入つて平伏する。

荻生徂徠が「今は大形武道は地に落たる様なれども」と書いたのはこれより六十年も前の事だが、久しい泰平の世の武士の「柔弱」振りには目に餘るものがあつたのである。勿論、「ぬらくら」ならざる武士がゐなかつた譯ではない。「寛政の三奇人」の林子平、高山彦九郎、蒲生君平の如き剛直の士も活躍してゐたし、彼等の「士魂」は幕末維新时期に迄受繼がれる事になる。だが、やはり多くは「ぬらくら武士」だつたのであり、幕府がいかに旗を振らうと、かく迄の士風の頽廢の立直しが果して可能なのか、との作者の疑念もしくは批判さへ作品からは窺へるやうに思ふ。それかあらぬか、幕府から秋田藩主に壓力がかかり、喜三二は斷筆して江戸を去るの已む無きに至るが、それはさて置き、武士の世に於てすらこの爲體であつた。昨今、國際社會に天下大亂の兆が瀰漫しつつあり、吾國民の國防意識の希薄に警鐘を鳴らす識者も少くないが、「今にもいくさがあるならば」と本氣で考へようとせぬ「ぬらくら」の體質は實に實に根深いのである。